

■新入生に安全なブロック、タックルを指導。QBクリニックも

アメリカンフットボールによる外傷性脳障害などを防ぐ「ヘッズアップ・フットボール」を紹介する「ヘッズアップ・クリニック」と、元日本代表QBが指導するQBクリニックが7月7日、江別市の札幌学院大で開かれ、8大学の1年生を中心に50人が講義と実技で学んだ。

北海道学生アメリカンフットボール連盟が、日本アメリカンフットボール協会の協力で開いた。「ヘッズアップ・クリニック」は3年連続の開催。午前中の講義では日本協会ヘッズアップ・フットボール指導員の飾磨宗和氏（立命館大、Xリーグ・松下電工インパルスOB）が、米国で2012年に始まったヘッズアップ・フットボールの取り組みを紹介。①首のけがを防ぐためにコンタクトの時にヘッドダウンしない②外傷性脳障害を防ぐために頭部のコンタクトの頻度を下げるーとポイントを挙げ、ヘッズアップを導入した米国のリーグで、けがが76%減った例も紹介した。



屋外グラウンドに会場を移した午後の実技では、ヘッズアップ・ブロックとショルダー・タックリングを早速体験した。飾磨講師は「セットの時に背中を丸めない」「ブロックは手のひらでヒットする。親指を上に向けて、下から上に相手を持ち上げるように力を使う。タックルはキャリアに近い方の足を一步

踏み込み、胸を当てに行く」と、頭への衝撃を避け、首のけがを防ぐブロックとタックルを伝えた。

また、初めて行われたQBクリニックでは、早稲田大のエースQBとして甲子園ボウルに出場し、NFLヨーロッパにも挑戦した波木健太郎氏が6人にパスの基本などを指導。一人一人のスローイングをチェックし、腕や体の使い方を助言した。（広報委員 塚田博）

